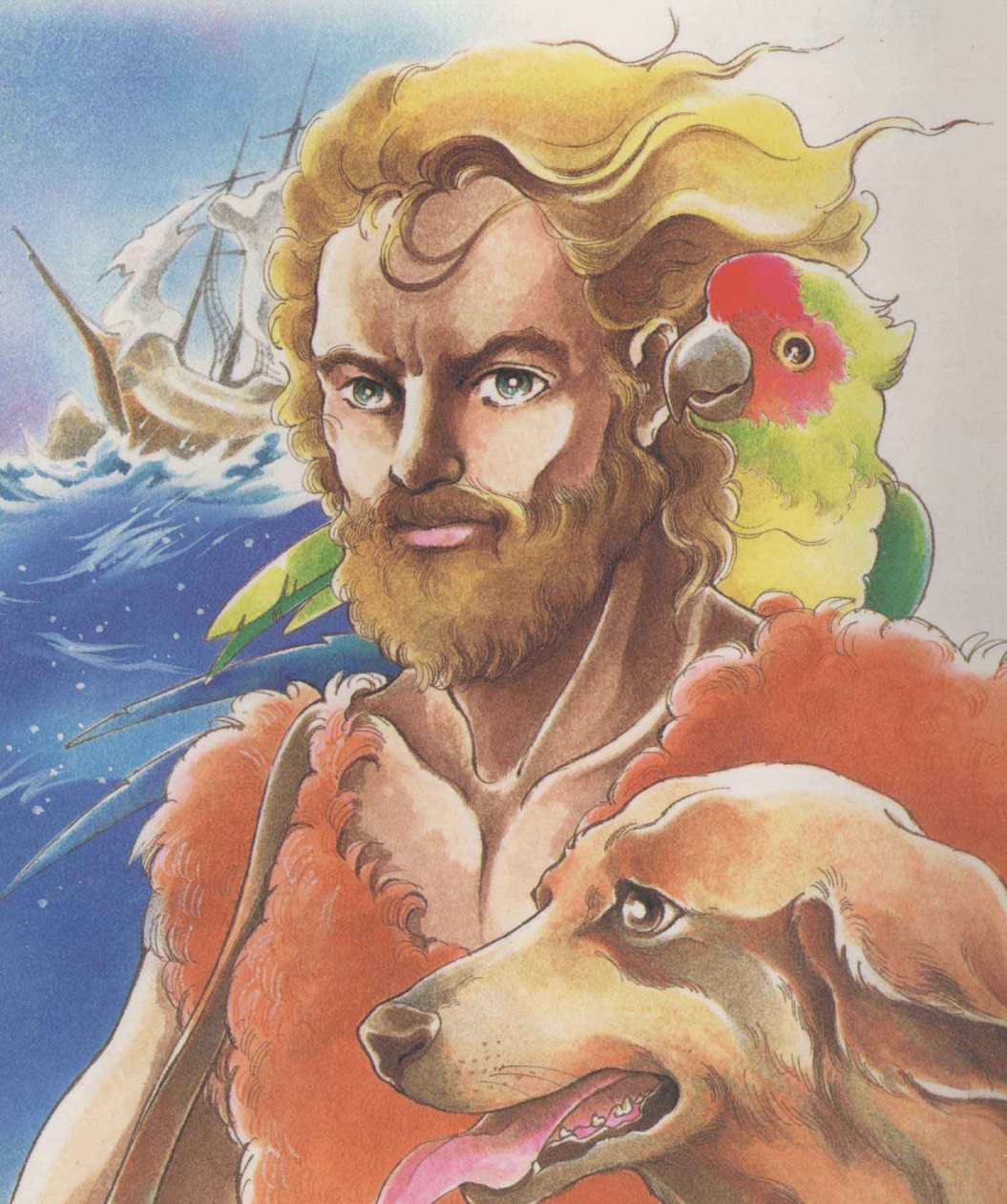


こども世界
名作童話
12

ひょう りゅう き

ロビンソン漂流記

作・デフォー 文・小沢 正





こども世界名作童話12

ロビンソン漂流記

一九八七年十二月 第1刷
一九九三年五月 第11刷

作 ✧ デフォー

文 ✧ 小沢 正

絵 ✧ 村井香葉

発行者 ✧ 田中治夫

編集 ✧ 福島聖氏・橋本玲子

発行所 ✧ 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町五 二一六〇

振替東京四一四九二七一

TEL ○三—三三五七—二二一六(編集)

○三—三三五七—二二一一(営業)

印刷 ✧ 瞬報社写真印刷株式会社

製本 ✧ 島田製本株式会社

ひょう りゅう き

ロビンソン漂流記

デフォー・作

小沢 正・文

村井香葉・絵



❖ もくじ ❖

あらしの海で

4

ここは無人島だ

22

シチューがたべたい



ふね
舟はできたけど

56

あし
あやしい足あと

73

てっぼうとフライデー

89

しま
島よ、さらば！

109

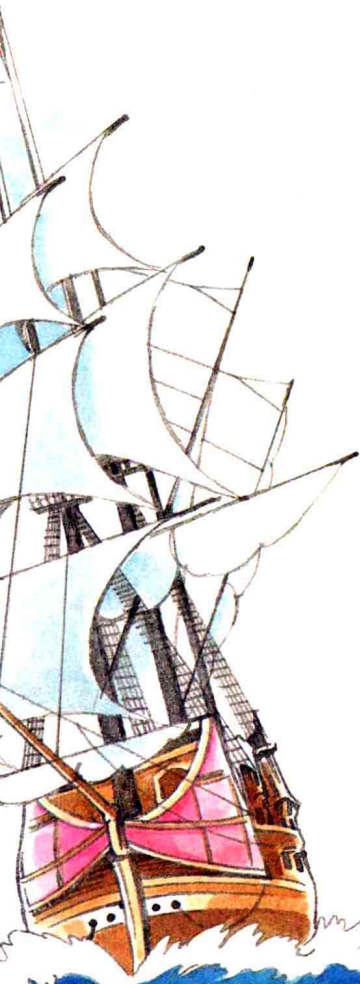
解説

132



あらしの海^{うみ}で

わたしは、イギリスのヨークという町^{まち}の生^うまれで、なまえは、ロビンソン・クルーソー。小^{ちい}さいときから、海^{うみ}がだいすきで、船^{ふな}のりになるのがゆめでした。





でも、とうさんとかあさんは、

「船ふねのりなんて、とんでもない。どこでいのちをおとすことになるやら、わかりやしないんだから。」

といって、どうしても、たのみをきいてくれようとしません。

しかたなしに、わたしは、とうさんやかあさんにはだまつて家いえをぬけだすと、みなとでしりあつた人ひとにたのんで、外国がいこくいきの船ふねにのせてもらうことにしました。

ところが、なんということか、のりこんだばかりの船ふねが、あらしにあつて、しずんでしまったのです。わたしたち乗組のりぐみ員いんは、いのちこそたすかったものの、ボートでなん日にちも海うみの上うへをさまよつたあと、やつとのこと、陸地りくちにたどりつくと

いったありさま。

つぎにのりこんだ船ふねは、海かいぞくにおそわれました。わたしたちは、せいっぱい、たたかいましたが、海かいぞくがあいてでは、かなうはずもなく、ひとりのこらず、つかまったり、けがをおわされたり。わたしもつかまって、外国がいこくの金かねもちの家いえへ、めしつかいとしてうりとばされてしまいました。

ありがたいことに、その家いえの主人しゅじんは、わたしを気きにいつてくれたようでした。この人ひとは、船ふねにのつて海うみへさかなをつりにいくのがすきでしたが、そんなときには、きまって、わたしをつれていつてくれたりしたのです。

そうしたある日ひ、主人しゅじんがまた、つりにでかけることになり



ました。おまけにこんどは、主人^{しゅじん}のおきやくも、いつしよにくるとのこと。そうきいたわたしは、ひとあしききにみなとへでかけると、いつもよりねんいりに、船^{ふね}あそびのしたくをはじめました。

そこへ主人^{しゅじん}がやってきて、いいました。

「ロビンソン、あいにく、きやくが海^{うみ}へいけなくなつてしまつたんだ。わしも、きやくのあいてをするために、家^{いえ}にいなけりやならん。すまんが、きようは、おまえひとりで、さかなをつつてきてくれんか。きやくにごちそうするつもりだから、できるだけ、りっぱなやつをつつてくるようにな。」

「かしこまりました。」

わたしは、うなずいて、船ふねのほをあげると、みなとをあとにしました。

（このまま、にげだしてしまつたら、どうだろう。）

そんなかんがえがあたまにうかんできたのは、しばらくたつたときでした。

きやくがくるというので、船ふねには、たべものや、のみものが、たくさん、つみこんであります。だまつてにげだすなんて、しんせつな主人しゅじんに、もうしわけない気きがしますが、こんなチャンスは、めつたに、めぐつてくるものではありません。
（よし、にげだそう。）

わたしは、心こころをきめると、沖おきにむかつて、ぐんぐんと船ふねを

はしらせました。

ところが、しんまいの船ふなのりのかなしき。二、三日にちたつうちには、もう、どこをはしっているのかわからなくなつて、海うみの上をうろうろしはじめました。

氣きがついてみると、たべものも水みずも、もう、ほんのすこししかのこつていません。

（いよいよ、おしまいか。）

そうおもいましたが、うんのいいことに、そばをとおりかかった船ふねが、わたしに氣きがついて、すくいあげてくれました。その船ふねは、南アメリみなみカのブラジルへむかっているところでした。船長せんちょうというのが、また、おどろくほどにしんせつな

人で、わたしを、ただで、ブラジルまでのせてくれました。
おまけに、

「きみののっていた、つり船だが、かまわなければ、わたし
がかいとしてあげよう。」

といって、お金まではらってくれたのです。

ブラジルへついたわたしは、船長からもらったお金で土
地を手にいれ、はたけをつくることにしました。このしごと
は、おもったよりも、うまくいって、四年ほどたつうちには、
かなりのお金がたまりました。

あとでなんどもかんがえたことですが、ここで、まんぞく
しておけばよかったのです。

あのまま、あと十年ねんもはたらきつづけていれば、わたしも、かなりの金かねもちになれていたにちがいありません。そうすれば、とうさんやかあさんのところへも、大おおいばりでかえっていくことができていたはずなのです。

ところが、ちょうど、そのころ、しりあいの男おとこが、わたしのところへやってきて、

「アフリカへいってみようというはなしが、もちあがつているんですがね。」

と、いいだしました。

「アフリカ人じんたちに、ビーズ玉だまとか、貝かいがらのくびかざりとか、やすもののかがみとか、そういったおもちゃみたいなも

のをくれてやるんです。すると、どうなるとおもいます？
あいては大^{おお}よろこびで、ぞうげだとか、さ金^{きん}だとかといった
たからものを、どんどん、わたししてくれるというわけですあ。
一ど、でかけていっただけで、大^{おお}もうけ、まちがいなし。ど
うです、あんたも、なかまにはいることにしては？」

「よし、いれてもらおう。」

わたしは、そのばで、しようちしました。

たしかに、大^{おお}もうけのはなしもわるくありません。でも、
それより、船^{ふね}のたびということばに心^{こころ}がおどりました。あれ
だけ、さんざんなめにあつたというのに、わたしは、やはり、
海^{うみ}をわすれられずにいたらしいのです。

船^{ふね}は、わたしがのりこむのをまちかねていたように、みなとをはなれました。

それから、まい日^{にち}まい日^{にち}が、おてんきつづきでした。くもひとつみえない空^{そら}に、たいようがガラガラとかがやいて、そのあついことといったら。海^{かい}ぞくがでやしないかとしんぱいしていましたが、そんなようすもなく、わたしたちの船^{ふね}は、アフリカをめざして、ぐんぐんと海^{うみ}をすすんでいきます。

（やれやれ、こんどはどうやら、なにごともなくおわりそう
だ。）

そうおもってほっとしたのもつかのま。つぎの日^ひ、わたしたちは、あらしにまきこまれてしまいました。